Q▶ 船長・機関長になるには？

A▶ 船長・機関長や航海士・機関士、通信士（総称して「船舶職員」といいます）になるには「海技士（航海）、海技士（機関）」などの海技免許の資格の取得が必要です。

一般的には上位の級の海技士の海技免許を取得することで、より遠くへ行く、より大きな（より出力の高い機関を搭載した）船に船舶職員として乗船できます。
船舶職員に年齢や勤続年数は関係ありませんので、努力とやる気次第で若くして船長や機関長になれる実力主義の世界です。

（注）海技士（航海）などの海技免許を取得するには「海技士試験」と呼ばれる国家試験に合格する必要があります。
海技士試験の受験に当たっては、試験区分に応じた実務経験（乗船履歴）が必要です。

Q▶ 船員はなかなか家に帰れない？

A▶ 外航船や多くの貨物船は数日～数ヶ月連続して航海をするため、長期間にわたって家に帰れないことがあります。

ただ、個室化やWi-Fi等のハード面の整備はもとより、司厨部員が乗り組んでいる船も多く、船員が快適に過ごせる工夫がなされています。また、長期間乗船した後はまとまった休みが取得でき、長期休暇があるからこそできる楽しみを満喫する船員も多くいます。

また、船の仕事の中には、1日数時間の運航といった「日帰り船」と呼ばれるものもあります。

（日帰り船の例）
- 曳船（タグボート）・・・小回りのきかない大型船をロープで牽引したり船首で押すなどして、狭水路の航行や離着岸の安全をサポートします。
- 給油船・・・海上や給油設備のない岸壁で他船の給油を行います。
- 渡船（渡し船）・・・ごく短距離の地点間において人や物を運びます。

曳船（日本海曳船）

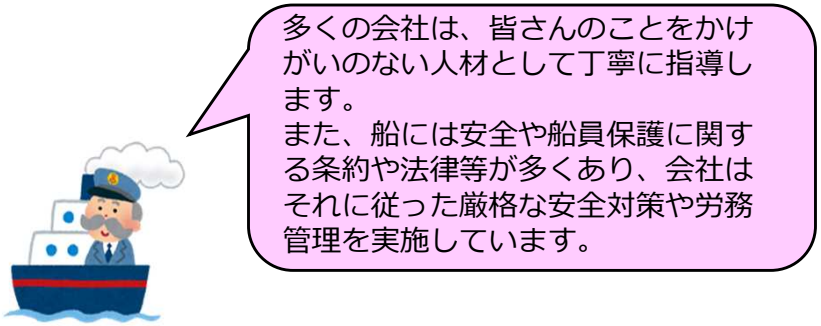
給油船（北日本石油）

渡船（富山県営渡船）

Q▶ 船員はやっぱり力仕事が多い？

A▶ 若いうちはある程度の力仕事は避けられないことは事実です。

しかし、海事産業自体が最新の技術の集合体であり、操舵や機関操作、荷役については、近年かなりの部分で自動化（≒人力だけに頼らない）工程が多くなっています。

海事産業界においてはDX（※）が進められており、最先端の技術を活用した省力化・自動化が推進されています。
例えば、船における故障等の情報をAIを使用して集積・分析し、故障等の予兆を発見したり、それに対応する技術開発に活用されています。また、船の着岸作業など、危険を伴う作業の自動化・無人化も進められており、船員の事故防止にも貢献しています。

※DX（ Digital Transformation ）…デジタル技術の活用を通じて、経営や業務等の構造を変革すること